



マッセ・市民セミナー
(NPO法人ちやいんどネット大阪共催)

支援の必要な子どもと共に 安心できる集団づくり

開催日：令和元年9月13日(金)

会 場：テクスピア大阪 大ホール (泉大津市)

マッセ・市民セミナー

(ちやいるどネット大阪・マッセOSAKA共催講座) (泉州ブロック)

支援の必要な子どもと共に安心できる集団づくり

小田 浩伸氏
(大阪大谷大学)

日時：令和元年9月13日(金) 14:00~16:30

会場：テクスピア大阪 大ホール (泉大津市)

1. インクルーシブ教育(保育)システムの構築に向けて

—合理的配慮と基礎的環境整備の課題—

私は、そもそも支援が必要でない子はいないと思っています。全ての子どもは支援が必要です。ただ、支援がたくさん必要な子もいれば、ほとんど要らない子もいる。その子に応じた支援があることが平等であり、これを目指していくのがインクルーシブ教育(保育)の考え方だと思っています。

インクルーシブ教育(保育)は、平成18年に「障害者の権利に関する条約」が国連総会で採択されたことが大元になっています。この条約を日本が批准したのが平成26年なのですが、この間の8年をかけて国内法が整備されました。その中に「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律(障害者差別解消法)」があり、インクルーシブ教育(保育)システムを作っていこうということになりました。人間の多様性を尊重していこう。障がいのある子どもが最大限の力を発揮できるようにしよう。そして、自由な社会に効果的に参加可能にすることを目的に、障がいのある子どもとない子どもが共に学ぶ仕組みを作っていこうというのがインクルーシブ教育(保育)の考え方です。保育所・幼稚園・認定こども園等に障がいのある子どもたちがどんどん来るようになってきた背景にはこういうことがあるわけですが、これはただ一緒にすれば何とかなるというものではないので、不当な差別的取り扱いの禁止や合理的配慮の提供が求められています。

これは障害者差別解消法の大事な視点ですので皆さんにも考えていただきたいのですが、例えば、就学相談で車椅子に乗っている子の保護者から「うちの子は脳性麻痺で肢体不自由です。この子の教育をこの小学校でやってもらえますか」と言われたとします。そのとき、校長先生あるいは就学担当の先生は「この学校では肢体不自由を主に勉強してきた先生は今のところはいないんです。十分なことはできないということをご承知お

きいただき、入学してこられるならばできるだけのことはいと思います」と答えようと思います。これは不当な差別的取り扱いと受け止められるでしょうか。

これは、車椅子に乗っているということを前提に、つまり障がい理由に「十分なことはできないと思います」と言われていると受け止めるならば、やはり不当な差別的な取り扱いという印象になる可能性が残されていると思います。では、どんな言い方をすればよいのでしょうか。もちろん完璧な言い方はないのですが、私は「この学校に入学されるならば、このような体制で、このような計画の下に、このような個別の指導を受けることが可能です。しかし、今のところ肢体不自由を専門に勉強してきた先生はいないので、十分なことはできないということをご承知おきください」と話した方がいいのではないのでしょうかと言っています。何が違うのかというと、できないことから話さない、否定から入らないということです。これは、在園児の保護者と話すときも同じで、「いや、それは無理ですよ」と頭から言わない。こうすることは可能ですよ、一緒に考えましょうというスタンスが大事です。これが、障害者差別解消法の非常に重要な観点だと思っています。不当な差別になっていないか、合理的配慮の提供ができていくかどうかということです。

では、保育園や幼稚園における合理的配慮とはどのようなことを言うのでしょうか。それは、障がいのある子どもが、障がいのない子どもと同等の機会を得るために、みんなと一緒に取り組んでいけるようスタート地点を整える、言い換えると集団に参加できるよう条件を整えるということです。そして、どのような集団で、どのような活動を行うかによって提供される合理的配慮は異なり、それはもっと基本的な複数多数に対する支援、すなわち基礎的環境整備と明確な境界線を引くことができない側面があることから、両者一体となった取り組みが期待されています。

ある幼稚園で、自閉症の子が入ってくるということで、視覚支援の工夫をしていました。それは自閉症の子どものために用意した合理的配慮のつもりだったのですが、しばらくするとその子よりも他の子の方がよくそれを見るようになりました。あるいは、車椅子の子のためにエレベーターを設置したら、途端に他の人も必要があれば乗ようになる。こういうことはよくあります。つまり、合理的配慮として取り組んだことが、実施した途端に基礎的環境整備が変わっているわけです。ですから、合理的配慮が先ではなくて、基礎的環境整備の上にあるのが合理的配慮だという考え方になってくるといいわけで、基礎的環境整備は保育のユニバーサルデザインと基本的には同じ考え方になります。基礎的環境整備が高い幼稚園・保育園は合理的配慮が少なくて済むのですが、基礎的環境整備が低い幼稚園・保育所ではたくさんの合理的配慮が見えてしまう。だから、基礎的環境整備が限りなく高い学校がいいということになるわけです。

2. 多様なニーズのある子どもの理解と支援

2-1. 子どもの特性を視る三つの視点

ここで、気分転換に1枚絵を見てもらいましょう。ウサギさんがいます。ウサギさん



が3匹の動物を見つけました。どこにいますか。リスさんがいました。ゴリラがいました。シカがいました。3匹いましたね。これで全員分かったと思いますから、次に行きたいと思います。こう言うと、分からなかった人は不安になったと思います。それが、分からないまま置いていかれる子どもたちの気持ちです。つらいですね。せめて答えを見せてほしいですね。答えを見れば、ちょっと安心すると思います。どうでしょうか。これで分かったふりをしなくて済むので、ほっとしますよね。こんな状態になっている子どもたちがいるわけです。

子どもが困っていることというのは本当にさまざまです。それに気付くために、私は三つの視点でしっかり見ていかないといけないと思っています。これは幼稚園・保育所、小・中・高で共通です。

一つは、「発達障がいとその可能性のある子ども」という視点です。幼児期にはほとんど診断をもらっていませんし、小学校に行っても半分ももらっていないと思います。ですから、小さいうちは可能性のある子どもの方が多いと思います。この発達障がいとその可能性のある子どもは非常に多いのですが、発達障がいに関する研究はこの10年間で相当進んできています。

二つ目は、「虐待が起因している可能性・愛着面に課題のある子ども」という視点です。これは今いろいろなところで話題になっていますが、実は愛着面に課題が生じる原因は虐待だけではないのです。3人きょうだいの真ん中の子が、上と下との関係で「自分は要らん子かな」と思って愛着面の課題が生じている場合もあります。しかしながら、虐待が背景にあることが非常に多いのは確かです。発達障がいよりも、虐待によって愛着面の課題が生じている子の方がずっと難しいと思います。虐待には暴力、ネグレクト、心理的虐待が非常に多いとされていますが、この三つのうちで一番多いのが心理的虐待で、全体の約70%を占めるというデータがあります。例えば言葉による暴力、「本当は要らなかったんや。何で生まれてきたんや」とか、「お姉ちゃんはええのに、何であんたは」と言われ続ける。あるいは、ハードルを高く上げて絶対にできるからと言われている、逆にずっと下げてどうせ無理だからと言われている。一生懸命話しているのに無視される。そして、多いとされるのは、お父さんとお母さんなど、大事な家族が大げんかするのを見ている。そこにDVが入ってくると心に傷が残るわけです。心理的虐待というのは非常に幅が広いですし、特定しにくい部分があります。しかし、いろいろなところに巡回相談に入っていると、心理的虐待は非常に多いと本当につくづく思います。例えば保育所・幼稚園で、もめごとがあると、遠いところにいたはずなのに近くに寄ってきて見ているという子はいないですか。心理的虐待を受けている子は、共通してトラブルに過敏になっていて、小学校くらいになるとそれが原因で不登校になる子もいます。

または、「殺すぞ」とか「死ぬ」「どっか行け」と、やたらと汚い言葉を使う子はいませんか。先日行った幼稚園で、扇風機に砂を入れている子がいました。当然、叱られるわけですが、叱られると絶対に反発します。これも特徴的なことです。その反発の仕方というのがまた激しくて、ぐさっとくるような言い方をすることがあります。その



子は「おばはんうるさい。どっか行け」と。これには先生はそれほど困っていなかったのですが、その次に「同じ空間の中で同じ空気を吸うてることがうっとうしいんじゃ」と言ったのです。さすがに先生はちょっとしょぼんとしていました。私はちょうどそこに居合わせたので、先生に「これが5歳の子の心から湧き出てくる言葉だと思いますか」と言いました。そんなセリフはテレビからもめったに聞こえてきません。ということは、家で誰かが言われているのを聞いているか、または、自分が言われているのでしょうか。そう考えると、「死ぬ」「消えろ」「殺すぞ」という汚い言葉を発する子どもたちもある意味では被害者です。そういう視点で見えていかないと、子どもたちの言動を冷静に受け取れない場合がありますので、これは非常に大事なことかなと思っています。

中・高になってくると、男性にすごく接近していく女の子が出てきます。危険な状態です。危険なのですが、愛着面に課題がある子は、それが愛着を確認する行動なのです。成育歴によるものなので、その子も被害者です。それを受け止めておかないと、行動だけを見てしまうと「何ちゅうことすんねん」となってしまいます。

最近、鹿児島と東京の目黒で、虐待で亡くなった子どもがいました。結構同じ構図があると思うのが、虐待されていたのがお母さんの前のご主人の子だったということです。体を張って守ってあげないといけないお母さんが見て見ぬふりをしたり助長したりしているという、こんな悲しいことはないわけですが、これは氷山の一角で、巡回相談に行くとは本当にいろいろなことがあります。恐らく先生方もいろいろ経験されていると思いますが、一つだけお話しすると、3歳と4歳の男の子の巡回相談に行きました。2人は年子ですが、お父さんは違います。最近はきょうだいが3人、4人いてお父さんがみんな違うと聞いても驚かなくなりました。最初、4歳のお兄ちゃんのところに行くと、「今日はおばあちゃんのところへ帰るの」と、うれしそうに言っていました。「そうなの。よかったね」ということで、次に3歳の弟のところに行きました。すると、先生が「今日はお休みなんです」と言うので、「ああ、そうなんですか。体調壊したんですかね」と聞いたら、「いや、旅行に行っているようです」と言うのです。「え？ お兄ちゃんおったのに？」と思わず言うと、今の新しいお父さんと実の子とお母さんの3人で旅行に行っているというのです。お兄ちゃんは、それを「おばあちゃんのところ大好きだから」と言っている。先生は、それを「これまでに何回かあったんです」と、あまり大きく受け止めていませんでしたが、これはもう物心付いた子どもに対しては心理的虐待そのものですね。こういったことがいくらかでもあるのが今の状況です。心理的虐待は70%では済まないだろうと思うほどです。心理的虐待を受けた子どもは反発したり、人が信じられなくなっているわけで、発達障がいの子どもよりもずっと難しいですし、両方併せ持っている子が多いのも事実です。

そして、三つ目は、「認知面・知的発達に課題のある子ども」という視点です。これは幼稚園・保育園ではあまり分かりませんが、小学校に行くとは顕著になってきます。発達指数80の子は、特別支援学級にはまず入りません。80あればみんなと取りあえずやっていきましょうという感じになるのですけれども、実は発達指数80というのは発達年齢

で言うとうと1歳ぐらい遅れているので、勉強にはほとんど付いていけません。90でも、ワーキングメモリーが少し低いと付いていけない子が結構います。ですから、80前後の子というのは、支援のはざまになっていて、いろいろな手立てが受けられていないわけです。小学校に入ると、みんな分かっているのに自分だけが分かっていない。そして、それが分かるのです。だから、不登校になるのも一番多いのはこの層です。そして、周りに巻き込まれたり利用されたりしてしまうような子もこの層です。ですから、私が冒頭申し上げたように、支援が必要でない子はいないと考えていかないと、支援が必要かどうか考えるのが一番後になる、もうちょっと様子を見ようとなる子たちが、後で課題が一番大きくなっているというのが現状なのです。覚えていないし、反発するし、意味を理解できていない。中学に行って生徒指導で問題があるのは、この三つが重なっている子だと思います。

2-2. 子どもを取り巻く社会状況

こうした特性とともに、今の子どもたちが置かれている社会の現状について、ちょっとここで話しておきたいと思います。例えば、自分の命に限りがあることが分かったとします。そのときに、神様が自分の周りの大事な人、大事なものを、何でもいいので一つだけ残してくれると言ったら、何を残してほしいと希望しますか。この質問を実際にある大学の先生が学生に対して非公式でしたところ、圧倒的に多かった答えが、何とスマートフォンだったのです。これを聞いて私も驚きました。しかし、その理由を聞いて納得しました。どういうことかということ、スマートフォンさえあれば一人に絞らなくても誰とでも話ができる。思い出の写真はその中にみんな入っている。自分の存在を世界に発信しようと思ってもできる。どうしても必要なものがあつたらボタン一つで手元に届く。確かにそうです。命の次に大事なものがスマートフォンになりつつある、それが当たり前の子どもたちが、皆さんの目の前にいるわけです。

子育て支援センターや保健センターで見ている、授乳しながら携帯を触っているお母さんたちが本当に多いです。それが当たり前になっていて、子どもたちはそれを見ているという、すごい状況になってしまっているわけです。いい方に使えばいいですが、違う方向に向かうと依存になります。皆さんはゲーム障がいというのが、障がいの症状の中に位置付けられたことはご存じでしょうか。インターネット依存のゲーム障がいが、既に治療対象になっている。今はそんな状況になってきているわけです。そういうことが当たり前になってきている子どもたちに、皆さんはまず最初に関わるわけです。

視覚情報だけで、言葉はほとんど聞いていない子どもたちです。想像しなさいと言っても、検索すればぼんと出てくるわけですから、想像力はありません。そういう今の子どもたち、今のというのは幼稚園・保育所、小学校の子どもたちも、やがて就職します。そのときに、三つのライバルが出てきます。このライバルたちとは共存していかなくてははいけないので、敵ではありません。しかし、ライバルになります。

一つはAI（人工知能）です。2045年には人工知能が人類を超えるとも言われていて、

これからは知識レベルの仕事、案内等の知識があればできる仕事はみんなロボットがするようになります。先日、大阪の池田市のある小学校の校内研修に呼ばれて行ったところ、校長室で校長先生と一緒にペッパーくんが「ようこそ、小田先生」と迎えてくれました。驚きましたが、今、小学校ではプログラミングの授業があって、ペッパーくんソフトを入れて動かしているのだそうです。ドコモと契約して、池田市の全ての学校にペッパーくんがいるそうです。

二つ目のライバルは、外国人労働者です。日本では人口がどんどん減っていて、今のままでいくと40年後に日本の人口は明治維新の頃と同じくらいになると言われています。これは大変なことです。その中で日本の経済を支えていくためには、どうしても外国人労働者の人が大勢必要になってきます。そうすると、その人たちの子どもが幼稚園・保育所や小学校に入ってきたときに、日本語が分からないこととは別に支援が必要だと気付くのに時間がかかるというようなことも課題としてあると思います。

三つ目のライバルは高齢者です。高齢者が、これからの社会の中での最大のライバルであり、共存していかなければいけない人たちです。くしくも今、年金の受給開始年齢を75歳まで引き上げようかという話が出てきています。もう数年たつと65歳までは働かなくては行けない時代になります。人生90年時代には、75歳まで働かないと経済的に大変になります。その中で、65～75歳の人を雇用するか、新卒の人を雇用するかという時代になってきているのです。どちらを採るか、どちらの方が安心できるか、仕事をするか、将来性があるかということになってくるわけです。もう実際にそうってきているのかもしれませんが。そう考えると、今の子どもたちにどんな力を付けて社会に送り出していくかは、保育・教育の大きな命題です。今までの知識レベルの保育・教育ではライバルに勝てませんし、単に勝てないだけでなく、いろいろなことを乗り越えていけません。今の激動する世界の中で、変わっていく価値観にどんなふうに対応して、どんなふうを考えていくかという力を付けていかないと、惑わされるばかりです。こんなことが今大きな課題としてあるわけで、そのために保育・教育はどうあるべきかを考えていくことが、私たちの大きなミッションだと思うわけです。

2-3. 保護者に寄り添う支援

今は、幼稚園・保育所の年長くらいから自己肯定感が低下しています。そのため、以前は学級崩壊が問題になるのは3年生ぐらいが当たり前だったのですが、今は1年生で回ってきたプリントを「要らん。どうせ破って捨てるもん」と言い、誰かが保健室に行ったら、これ幸いと「僕も行く」と言い、大変な状態になっています。ですから、幼稚園・保育所から小学校にいろいろな情報が伝わっていないと、クラス編成が大変です。その意味で小学校との連携も非常に大事な視点だと思いますが、その根底には自己肯定感の低下があります。

発達障がいについては、今は学習障がい（LD）は限局性学習症、ADHDも欠陥とか障がいという言葉を使わずに注意欠如多動症、広汎性発達障がい（自閉症、アスペル



ガー、高機能自閉症)を総称して自閉スペクトラム症と呼んでいます。障がいは付いていません。最近私のところに来ていた3歳の子の診断名は「発達症」になっていました。つまり、そういう症状がありますよということです。症状はあくまでも症状であって、周りの理解と支援があって、ナチュラルサポートできるような環境であるならば、それはある意味では個性・特性として受け止められる可能性が十分あるわけです。しかし、理解されず、また支援がない中で生きづらさや過ごしにくさ、困り感が高まると、それが障がいになるわけです。障がいは固定的なものではないのです。ですから、何とか障がいではなく、そういう症状がありますよということにしよう。このようなことがもう始まってきたということです。このことは、知識として知っておいていただきたいと思っています。

保育・教育共に大事なことは、やはり科学です。根拠を持ってしっかりと子どもを見ていくためには、記録をきちんと付けることが大事だと思います。検査だけでなく、記録も根拠になります。また、絵や自由画などからもいろいろなことが読み取れます。例えば、1歳ぐらいの子が描く絵は殴り書きです。2歳になると丸が閉じられてきます。そして3歳ぐらいになると丸の中に丸が入ってそこから手足が出てくる。これが4歳、5歳、6歳ぐらいまで頭足人だと認知的な課題も想定されます。また、気になる子の中には手を描かない子がいます。特に指を描かない。手や指というのは一番敏感なところで、外界との接点です。そこを描かないのは外界との関わりにあまり興味がない子が多いです。あるいは、運動会で演技をしている自分たちと観客の両方を描いている、全体像を画像のように取ってきているのは、同時処理の子が描く絵に多いです。多いというだけでみんなではありませんが、こんなふうに絵からいろいろな認知特性を推測することもできるわけです。

ともかく、根拠をきちっと持って保護者と話をすることが大事だということです。それによって、保護者との信頼関係が生まれます。保護者は、診断が付くと普通の子ではなくなってしまうのではないかと思ってしまう場合があります。また、障がいを認めると、その後どうなっていくのか不安です。この子は就職できるのでしょうか、結婚できるのでしょうかと聞く保護者もいます。子どもに障がいがあると分かったら、親としてやっていけるかどうか不安なのです。誰が原因なのか、家族にどう説明するかということ強く訴えてくる方もいます。だから、いろいろな支援を否定する、拒否する保護者がいますが、分かっているのです。本当に分かっていたら無関心です。そういう保護者の気持ちに、私たちは敏感に対応していく必要があると思います。

そうは言っても、保護者の気持ちを受け止める、寄り添うというのは、簡単なことではありません。こんなことがありました。小学校2年生の子のお母さんが、子どものことで他の保護者との間でうまくいかないことがあって、このまま放っておくと良くないということで、校長先生から第三者としてお母さんの話を聞いてくれませんかという話があって、私が行くことになりました。その男の子は2年生で、すごく衝動性があって、いろいろな子とさまざまなトラブルを起こしていました。その日は、お父さんは来ず、



お母さんが1人で来ました。私が「学校と家庭が同じ方向を向いてやっていくために話をしましょうね」と言うと、お母さんは言下に「無理です」と言い、その後、止めるにも止められない状態で話し続けました。30分ほどたって、いよいよこれはいかなんと思っ止めようとした瞬間に、お母さんが「実は家でも」と言いだして、実はお父さんはもっと衝動性が高いということが分かりました。それで通報されたこともあったようなのです。「ですから、父親が帰ってきたら子どもに会わせないようにしています」と言うのです。どうも大きい家らしくて、そんなことができるらしいのです。おじいちゃん、おばあちゃんも同居していますが、その子にはあまり関わりません。お姉ちゃんにはいろいろなものを買って与えたりしています。それを聞いて、お母さんはこの子のために学校とも戦っているけれども、家でも戦っていることが分かったのです。私は、そんな話は学校から聞いていなかった、これは大変だなと思って、そこからじっくりお母さんの話を聞いていると、お母さんが本当に一生懸命やっていることが分かってきたのですが、同時に空回りしているなどということも分かってきました。

それで、お母さんの話が止まった瞬間、私は「お母さん、こんな難しい状況で、こんな難しい中で、今までよう投げ出さんと育ててきた。それだけでお母さん偉いわ」と言ったのです。これは本音でした。すると、お母さんはかばんからタオルを取り出して顔に当てて、体を震わせて泣きだしたのです。そして、しばらくしてタオルから顔を上げたら、来たときのきつい顔つきが変わっていたのです。そして、「うちの子は難しいでしょうか」と聞きました。私は、聞いていた話からADHDの特徴をはっきりと持っていることが分かったので、「難しいと思いますよ。お母さん一人で何とかしようとするのではなくて、いろんな人の知恵を集めて考えていく必要があるんですよ」と話しました。お母さんは、「私が難しいからこの子が難しくなっているとわれ続けてきました」と。その後、「今までよく育ててきたなんて、誰からも言われたことがなかったし、言われるとも思っていなかったの、その言葉で、そういうふうな見方をしてくれた人が一人でもいたことで、もう一遍頑張れる気持ちになれる」と言い、私がそこでもう一度、学校と同じ方向を向いてという話をしたら、「やってみます」と言ってくれました。その話を学校にもして、今いい方向に行きつつあります。

この経験で、保護者に寄り添うとはこういうことだったのだなと学び直した気持ちになりました。やはり寄り添っていかないと、上から目線になってしまったり、保護者が取り組んでいることを否定することになってしまったり、こちらの思いが保護者に入っていないなと思います。保護者と信頼関係を築いて連携していくには、まず保護者が取り組んできたことを肯定することから始めましょう。もう一つは子どものストロングポイント、強みを話題の中心にしていきましょう。この二つが大事だと思います。

これはワンポイントで、私のところに相談が来たとき、既に保護者と支援者の先生方の関係がねじれてしまっているケースが多いのですが、見ていると溝ができる言葉があるのです。それを三つだけお伝えしておきたいと思います。一つ目、保護者が一生懸命話しているときに支援者の先生方が言う「でもね」という言葉です。この言葉はよく使

われるのですが、これは否定なのです。逆の立場でも「でもね」と言われたら、違うふうに受け止められているなど分かります。その「でもね」が往復しているようでは、ほとんどかみ合っていないと思います。

二つ目、保護者があんなことをしてほしい、こんなことをしてほしいと言っているときに支援者側が言う「それはやってるんですけどね」という言葉です。そう言われてしまうと、保護者はやっても無駄だと言われているように受け止めてしまうのです。

三つ目は、「はい、はい」という言葉です。支援者の先生は、最初は「はい、はい」と笑顔で答えていますが、そのうちにその笑顔と声がだんだん小さくなってきて、めんどくさそうな「はい、はい」になってくるのです。相談者にしたら、聞いてくれないし、信じてくれないと感じます。このようなことで小さな溝が生まれて、何か事案が起こるとその溝が大きくなっていくわけです。

不安になって揺れている保護者が倒れてから「大丈夫ですか」と行くのは、支援ではなく事後対応です。こう考えると初期的な対応は非常に重要で、それぞれの園や保育所、学校だけで解決しようとするのではなく、保護者を学校教育と相談機関、福祉関係、医療保険関係でしっかり支えていけるようにしようと、今いろいろな場面で取り組みが始まっています。さまざまな関係機関で支えられながら、何かあったらどこに連絡すればいいかという知識があることで安心して生活していける。そういった環境が今構築されつつあると思います。実は今、サポートブックから個別の教育支援計画へということで、学校の中でずっと切れ目のない支援をつないでいくという形に取り組んでいて、それが大学までつながってきています。大学に個別の教育支援計画が高等学校から上がってくるようになりました。もういくつか事例が上がってきているのですが、大学まで個別の指導計画が上がってくる子はほとんど問題ありません。大変なのはノーマークの子です。そう考えると、ずっとつながってくるということは、守られているということなのだと思えます。

3. 子ども支援において大切にしたいこと

子ども支援において、皆さんに大事にしてもらいたいことを四つ挙げておきました。

まず、専門家または支援者による「大丈夫ですよ」という言葉です。この言葉を、保護者はうちの子には問題がないと、良いように受け止めてしまう場合があります。これは私も失敗したことがあります。ですから、「大丈夫」という言葉は、私たちは非常に慎重に使わないといけません。言いたいのですよ。保護者に「大丈夫ですよ」と言ってあげたいのですが、大丈夫が独り歩きしてしまうことがある。気持ちが和らぐ言葉ではあるけれども、ある意味では無責任な言葉になってしまうこともあるということで、慎重に使ってもらいたいと思います。

二つ目、保護者から「もう少し様子を見た方がいいですか」と、よく問われると思います。私はたくさんの事例を見てきた中で、早く支援が始まることによって支援が要らなくなったり、少なくなったりする子をたくさん知っています。一方、もうちょっと様

子を見ましようということで支援が遅れて、大きな支援が必要になってしまっている子もたくさん知っています。ですから、私は「支援は受けなければならないのではなく、受けることができるものです。早く始めませんか」と言うようにします。

三つ目、先ほどお話ししたように、発達指数80ということについて理解していただきたいと思います。

そして四つ目、「小中学校の支援学級からは高等学校に進学できないのですか」という質問をされたことはありませんか。中学校の支援学級に入ってしまうと高校を受けられないと思って、小学校は支援学級でも中学校からは支援学級を外れたいと希望する保護者もいます。これは誤解です。義務教育ですから、支援学級に在籍していても高等学校は問題なく受けることができます。支援学級に入っていると進学できないということはありません。そういったことも含めて、基本的な知識を持っておいていただくといいかと思います。

4. 安心できる集団づくりーナチュラルサポートをめざしてー

皆さんは、この絵は何をしているところだと思いますか。挨拶、お礼、おじぎ。実は私は、3人の自閉症の子にソーシャルスキルを教えようと思って、学生1人に補助に入ってもらってこのスライドを見せたのです。そして、「今からこれをします。さあ、今日は何をしましょうか」と言いました。もちろん「挨拶」という答えしか出てこないと思っていたわけですよ。ところが、アスペルガータイプの自閉症の子3人が一致して「トンネルですね」と言ったのです。私たちは文脈でしか見ないので挨拶しか思いつかないのですが、文脈で見ない子どもたちは形で見ます。

ですから、例えば落ちているものを取ってあげると、文脈で見れば「僕のを取ってくれてありがとう」ですが、この絵をトンネルと見るような子は、最後の情報しか入らないので「取った」と言うわけです。何かトラブルの原因を作っていると分かっているけど、その子は絶対に最後に言われたこと、されたことしか言わないということがありますよね。保護者にもたまにそういう人がいます。文脈で見るという継次処理と、ぱっと全体像で見る同時処理という認識の仕方があって、自閉症関連の子は同時処理が圧倒的に強いのです。流れ、順番では見ずに、ぱっと全体像で見る傾向が強い。ですから、彼らにはぱっと見て分かるように絵や写真カードを用いましょうと言われていきますよね。これは同時処理が強いからということが根拠になっています。

私たちの中でも、継次的な処理が強い人と同時的な処理が強い人、どちらともいえない人に分かれます。例えば、漢字を覚えるときに筆順で覚えるのは継次処理です。それに対して、同時処理が得意な人は偏とつくり、パーツとパーツで覚えていきます。だから、自閉症の子はおすし屋さんへ行くと魚偏の漢字をみんな覚えてくるのです。あるいは、家具を組み立てるときに、工程表を必ず見て作る人は継次処理です。同時処理タイプの人は出来上がりの写真を見て作っていきます。だから、自閉症の子はジグソーパズルが得意です。

ですから、計算はできるのに文章題を間違えるという子には継次処理で、「残りは幾つですか」とか「合わせて幾つですか」という文章題の大事なところに線を引きましょう。長い文章は句読点のところで区切りましょうと教えてあげると、解きやすくなる場合があります。あるいは、絵や工作をするときに、「今日はこんな絵を書くのですよ」と結論を先に出してあげるとスムーズに描けるのですが、「想像力を働かせて書きなさい」と言うと、ほとんど描きません。保育所・幼稚園に行くと、先生が「こんなことをしてこんなふうを描いてね」と言うと、何人かの子どもたちはそれで分かって描き出すのですが、他の子どもたちは何を書くのか分からないからずっと違うものを描いていて、誰か一番早く描けた子と同じように書いていくということがあります。そんなふう結局他の子のものを見ているのであれば、最初からモデルを出しておいてあげて、もういいかなと思ったら下げればいわけです。

また絵を1枚見てください。この中には、魚さんとかくれんぼしている4匹の動物がいます。どんな動物がどこにいるでしょうか。これは目を細めて見ても分かりませんが、認知を変えて柔軟に見ればすぐに分かります。でも、分からない人は不安になりますよね。子どもも同じです。周りがみんな分かったと言いだすと、不安なので取りあえず自分も手を上げておこうとなります。私たちは、そんな分かったふりをしないとイケない子にしないようにしなければいけません。

今の子どもたちは、視覚的なモデルがないとなかなか想像力を発揮しないことがあります。つまり、同時処理が強いのです。そういう子どもたちが増えていると、最近つくづく思います。そういう子には結論から入っていった方がいい。これが「分かる」保育です。後ほどもう少し詳しくお話しします。

大事なことは、子どもたちが安心できる集団をどうつくっていくかということかと思えます。安心できる集団というのは、ナチュラルサポートができている集団です。ナチュラルサポートができている集団は問題性は少なく済みますが、何を言われるか分からない、何を指摘されるか分からない安心できない集団では、いろいろな問題やトラブルが勃発してきます。集団との関連が非常に大きいということを私たちはしっかりと認識して、安心できる集団をどうつくっていくかということを考えていかなければいけません。

安心できる集団とは、違いを認め合える、失敗を認め合える、否定的に捉えない集団です。これが大事なのですが、実はこれには担当されている先生方の言動が非常に大きく影響します。極端に言うと、褒め上手の先生のクラスの子どもたちは褒め合いますし、叱ってばかりで否定的になっているクラスでは子どもたちも否定し合います。家庭にあまりいいモデルがない場合もありますから、先生方が本当にいいモデルになっていくことが、環境づくりのまず大事なところかと思えます。そして、そのためには安心できる教員集団であることで初めて、いろいろな力が発揮できると思いますので、ぜひ安心して、自己肯定感を高め合う職員集団であってほしいと思います。

例えば、子ども同士をどうつないでいくか。「どうしてあの子は給食をこぼしてば

かりいるの」と聞かれて、「もう本当にね。後片付けが大変なのよ」と言うのではなく、「練習してるのよ。だからみんなも協力してね。早く上手になるといいよね」と答えれば、周りの子どもたちはそれをまねて「何々ちゃん、頑張っているからね」と言えるようになります。そうして子ども同士をつないであげて、誰もが認められ、大切にされているのだという実感が持てると、安心できる集団になります。そういう集団をどうつくっていくかが非常に重要だと思います。

そのためには、早期から挨拶をすること、謝ることができること、お礼が言えること、困ったときにヘルプが出せること。こんなことが日常的になっていったらいいと思います。極端なことを言うと、挨拶をしない先生のクラスは子どもたちも挨拶をしませんし、悪いと思っていないのだったら謝るなどと言う親もいますが、一言ごめんねと言えたら、こんなに大きい問題になっていないのにといいばいあります。「ごめんね」「ごめんなさい」は魔法の言葉で、言った方も言われた方もほっとする言葉だから言えるようになるうね。こんなメッセージをいっぱい出していくことが大事なと思います。

挨拶、謝る、お礼、困ったときのヘルプ。この四つは、実は就労の条件でもあります。キャリア教育そのものになるという視点を持っていただきたいと思います。

そして、子どもが安心できる、やる気の出る支援の基本は、肯定的な指示です。子どもたちは褒められてこそ伸びますから、肯定的な指示を多くしていくことが大事だと思います。困ったことをしないでと言うのではなくて、困ったことをしなかったことを褒めていってあげる方がいい。「この時間、一回も外に出ていけへんかったら丸やで」と言ってあげたらいいし、「先生に言われなくても次のことをやろうとしたら二重丸だ」と言ってあげたらいいわけです。年長さんくらいになると、駄目なものは駄目と教えていかなければいけないということも当然あります。そのためにも、日頃からは叱らないことです。ずっと叱っていたら、重みが分からなくなるからです。

そして、ワンアップ、ワンダウンの対応を心がける。これはもう気を付けられていると思いますが、子どもたちがワンアップしたら先生方はワンダウンする。アップ、アップでいくと泥沼になるので、そうならないようにしていくことが大事です。幼稚園・保育園ではあまりないと思いますが、小学校では本当にどきっとするようなことがあります。先日、5年生の子が先生に怒って、「先生は、先生に向いてないんだ。早く辞めればいいんだ」と言ったら、先生のテンションが急に上がって怒鳴り合いになったのを見ました。ワンアップ・ワンダウンは非常に大事なことだと思います。

5. 支援教育の観点を活かした「分かる」保育の工夫

最後に、支援教育の観点を活かした「分かる」保育という話をしたいと思います。ある幼稚園から、人の気持ちが変わりにくいから、もっと分かるようにしたいという相談を受けて、私は、朝来たら、自分の顔のところに笑っている顔、怒っている顔、泣いている顔、困っている顔を貼っていつでもというのを提案しました。年少さんから

みんなです。そうすれば、何々ちゃんは今日は怒っているみたい。泣いているみたい。困っているみたいと、人のことも分かるし、自分のことも分かって、自分も人もいろいろな気持ちの変化があるのだということが分かるようになってきます。なかなか面白い取り組みだったと思います。

育ち合う保育におけるナチュラルサポートの視点をたくさん書いておきましたが、ポイントだけ見ていくと、「活動の全体像（完成形）や流れ（内容）を視覚的に示し、見通しを持てるようにする」ということです。見通しが持てるかどうかというのは、非常に大事なことなのです。だから、今からすることの完成形を貼っておいてあげる。見せておいてあげる。目の前に置いてあげる。そんなことをすることによって、今やることがはっきり分かって、ちゃんとできる子がいます。説明してもほとんど聞いていない子には、それが有効だと思います。また、小学校に入ってもそうなのですが、創作・製作しているときに先生が話していても、ほとんど聞いていないですよ。今は書くとき、今は聞くとき、今は話すときと、きちんと区別して同時にしない。こんなことも大事なナチュラルサポートになると思います。

近年、幼稚園のときから考える力を付けていこうということで、アクティブラーニングという言葉が出てきています。このアクティブラーニングにどんなふうに取り組んでいるか、幾つか例を出したいと思います。

冒頭に申し上げたように、これからは知識レベルを上げるだけでなく、考える力を付けていくことが保育でも教育でも大事です。では、その考えるというのは、どんなふうを考えていくのか。アクティブラーニングでは、疑問を納得に持っていくまでのプロセスを大事にします。ですから、まずは疑問を持たなければ、納得に持っていきません。ですから、もちろん知識を教えていかないといけない場面もあるのですが、たくさん疑問を投げ掛けて、それを納得に持っていけるような考える力を付けていくことが、これから小中高とずっと求められていくと思います。ですから、幼稚園・保育所の段階でも同じように、疑問を納得に持っていけるような想像力、共感性を育むということを考えてほしいと思っています。

例えば、猫が2匹で何かを見ながら話しています。猫たちがどんな会話をしているのか、子どもたちに吹き出しの中のセリフを考えてもらう。「今日の魚、おいしそうやね」「ちょっとぐらい残しておいてくれるかな」とか、「今日のご主人はちょっと機嫌悪そうだ。ちょっと気を付けないといけないな」「そうやね。今日は猫をかぶっておこうか」と、いろいろなセリフが出てきます。非常に面白いし、今求められている想像力とか共感性につながってくる部分があるかなと思います。

もう一つ、これはちょっと高度になるかもしれませんが、ウサギとカメの競争は、カメが勝ってウサギが負けました。アリとキリギリスは、アリが勝ちました。その負け組のウサギとキリギリスの復活戦を話題にした、私の知り合いが作った簡単なビデオがありますので見てください。

ビデオ「ウサギとキリギリス」

では、今のビデオにテーマを付けるとしたら、どんなタイトルを付けますか。これは高度で大人向けなのですが、小学校でよくあるのが、「本の帯を付けよう」という授業です。全体を把握できていなければテーマは付けられませんし、本の帯も書けません。こんなようなことを考えること、理解することも大事なことだろうと思います。何か題名を付ける。「失敗は成功の元」とか、バイオリンをやっていることでキリギリスは失敗したのに、やはり自分はその「強みを生かしていこう」などというものもあるかもしれません。

このようなものを子どもたちの発達段階ごとに用意することによって、いろいろな言葉がそこに集約されて、考える力や想像力を早い時期から付けていくことができます。これがアクティブラーニングで、幼稚園から小学校、中学校、高校、大学までアクティブラーニングということが言われているわけです。考える力を付けていまいしょうということです。

6. 保育者に求められる感性・専門性

最後に「保育者に求められる感性・専門性」ということでまとめました。まず、「適切な人権感覚と肯定的な感性を有していること」というのは、子どもの良さ、ストロングポイントをしっかりと捉えた上で、それを話題の中心にしていまいしょうということです。

「学び続ける意欲と行動力を持ち続けていること」。これはもちろんのことです。

「自分の感情をコントロールできていけること」。当然そうですね。怒るのではなく叱るとか、そういう感情のコントロールができることは、支援者として大事なことだと思います。

「話を傾聴するカウンセリングマインドを有していること」。保護者の話も含めて、傾聴するというカウンセリングマインドも大事だと思います。

「困ったときに相談できる人がいること」。これも大事なことです。

「クールヘッドとウォームハートを兼ね備えていること」。冷静な思考力・判断力と温かい心を持つておくことも大事です。

そして「主観的・客観的な見方・対応ができること」。私の知り合いが、難民キャンプを支援する活動をしていて、あるとき現地へ行きました。夜にベースキャンプに着くと、大きな建物の2階に案内され、そこには歓迎会ということですのでいい料理が用意されていたというのです。友人は、それを見て、「何でこんなところでこんな料理が食べられるのか。飢えている人に少しでも分け与えることはできないのか」と話したそうです。すると、出迎えてくれた人たちは、どうしてそんなことを言うのかと疑問に思ったというのです。

日本人の社会は、どちらかというと、同情的な、いわゆる同感的なものを求めて、宮



沢賢治のように、しんどい人がいたら、行って大丈夫かと言ってあげようというような、同じような気持ちに立って、同じように苦しようという、ある意味では母性的な社会です。一方、欧米の人たちの社会は、どうして自分の生活を守らずしてあれだけたくさんの人を守ることができるのか。食生活もきちんと自分で守っていかないと、どうしてあれだけの人たちを救えるのかという発想に立っています。つまり、客観的に見る父性的な社会です。私たち保育者は、その両面を持ち続けていけることが大事なのではないかと思えます。時には保護者や子どもに同調・同感といった母性的なものを求められるときもあるし、何をどうしたらいいのかと客観的に言ってもらいたいという父性的なものを求められるときもあります。今は母性とか父性という言葉はジェンダーであり使いたくない言葉なので、状況に応じてどちらの対応もできるということを、主観的・客観的という言葉に置き換えました。保護者や子どもに両面に対応していけるようにすること、また、役割分担ということもあると思えます。そのようなことも考えながらやっていけるといいなと思えます。

最後に、詩を一篇引用しました。私が30年子どもと関わってきた中で願いに共通するものです。皆さんの明日からの保育に、少しでも生かしていただけたらと思えます。

子どもは大人の鏡

- 子どもは、批判されて育つと、人を責めることを学ぶ。
- 子どもは、憎しみの中で育つと、人と争うことを学ぶ。
- 子どもは、恐怖の中で育つと、おどおどした小心者になる。
- 子どもは、憐れみを受けて育つと、自分をかわいそうだと思うようになる。
- 子どもは、ばかにされて育つと、自分を表現できなくなる。
- 子どもは、嫉妬の中で育つと、人をねたむようになる。
- 子どもは、ひげめを感じながら育つと、罪悪感を持つようになる。
- 子どもは、辛抱強さを見て育つと、耐えることを学ぶ。
- 子どもは、正直さと公平さを見て育つと、真実と正義を学ぶ。
- 子どもは、励まされて育つと、自信をもつようになる。
- 子どもは、ほめられ育つと、人に感謝するようになる。
- 子どもは、存在を認められて育つと、自分が好きになる。
- 子どもは、努力を認められて育つと、目標を持つようになる。
- 子どもは、皆で分けあうのを見て育つと、人に分け与えるようになる。
- 子どもは、静かな落ち着きの中で育つと、平和な心を持つようになる。
- 子どもは、安心感を与えられて育つと、自分や人を信じるようになる。
- 子どもは、親しみに満ちた雰囲気の中で育つと、生きることは楽しいことだと知る。
- 子どもは、まわりから受け入れられて育つと、世界中が愛であふれていることを知る。

あなたの子どもたちはどんな環境で育っていますか？

<引用> 「こころのチキンスープベストセレクション」ダイヤモンド社

『明日はもっと素敵な日』ドロシー・L・ノテル 「子どもは大人の鏡」より